

私は、雨が好きだった。

雨がポツポツと傘を打つ音、雨が樋から零れ落ちる振動。私は、そんなものに心惹かれた。それは幼い頃からそうだった。

雨が降った日には外へ出て、音を聞くためだけに傘をさす。じつとその場に立ち尽くしている、何も無い平凡な世界と一体化してしまいそうになって、それが嫌で歩き出す。わざと水溜りに入ってみたり、わざと屋根から落ちる雫にあたってみたり、そんな風にして一日を過ごした。田舎の道には、車なんて一台も通らない日がほとんどだ。だから私は長靴を脱いで、道路に出来ているくぼみを歩いた。傘を閉じて雨に濡れながら、友達と一緒に。

けれど、今ではもうそんなことは誰もやらない。

みんな成長して、きつとそんなことはもう覚えてさえない。

それでも私は、時々ふとした瞬間にあの頃の記憶を思い出す。あの頃は楽しかった、なんて言う感慨にふけるつもりはない。戻りたいだなんて言う夢をそつと抱くわけでもない。ただ、一人でほんの僅か思い出すだけだ。

今でも私は傘の音を聞く。そつと耳を澄ましはするけれど、立ち止まってまで聞きはしない。傘をさすのも音を聞くためではなく、濡れないためだ。今でも私は歩くけれど、それは得も知れぬ畏怖から逃れるためなどではない。ただ用事があるから歩くだけだ。雨が降った日には外へ出ない。長靴も履かない。雨に濡れようなどは考えもしない。私は話すまでもないほどの、誰にでもあるような経験ばかりを幾つも重ね、そんな風になっている間に自分を押し隠すことを覚えていった。自分を押し隠し、自我を殺し、そうしているうちに、あまり奇異なこととはしなくなった。あの頃の自分の行動を奇異と感じるようになって。だからもう、雨に触れようなんて考えもしない。おそらくそれが成長というものなのだろう。

きつといつかは、傘の音に耳を澄ますなんてことも馬鹿馬鹿しくなってくるのだろう。そうやって少しずつ成長し、昔何よりも嫌っていたはずの平凡というものになっていくのだ。